

BS1スペシャル『河瀬直美が見つめた東京五輪』書き起こしスクリプト

[前半]

タイトル：BS1 スペシャル

S1 (S1 から S12 は本編前のダイジェスト)：奈良の河瀬事務所？河瀬直美登場。字幕[映画監督・河瀬直美] モニターを見始める。字幕[東京五輪公式記録映画] 河瀬「やっぱり私、ショットで勝負したい、絵で勝負したい」 字幕[撮影 5000 時間以上、この夏]

(※編者注：ほとんどの台詞に字幕がつく)

S2：ブルーインパルス 字幕[57年ぶり東京五輪]

S3：おことわりリンク・反五輪の会の新宿デモ(21/6/23) [中止だ！東京五輪]のプラカ、『反五輪音頭』の音声。 字幕[新型コロナウイルス]

S4(撮影：公式記録映画)：河瀬(TOKYO2020 OFFICIAL FILM の黒いビブス)、橋本聖子と。字幕[大会組織委員会]ナレーション「改善のための内幕を克明に記録していた」

(※編者注：公式記録映画の映像多用。画面左上に「公式」のテロップ。以下スクリプトでは(公式)と記入)

S4：広島トーチリレー：ナレ「コロナ禍で撮影は難航」「並走やめてください。映画チームもダメです」とスタッフに止められ、河瀬「日本がせっかく世界にアピールできる映像なのに、そこを撮らせてもらえないと本当にもったいない」

S5：車内の河瀬。SNS 上の批判がテロップで流れる：「河瀬監督何言ってる自分が悪者になりたくないだけ」「オリンピックだけ特別扱いするのはおかしい」「記録映画全く期待できなくなった」「ごりごりなプロパガンダ映画になりそう」

河瀬「オリンピックの映画まだできてないからね。どんな映画にするかもわかってないのに、もう二度と見ないとか。なので私は眠れない夜を過ごしてますよそれなりに」

S6：モニターの前の河瀬と招致決定などの映像がカットバック。

河瀬「日本に国際社会からオリンピックを7年前に招致したのは私たちです。そしてそれを喜んだし、ここ数年の状況をみんなは喜んだはずだ。これは今の日本の問題でもある。だからあなたも私も問われる話。私はそういう風に描く」

※!!!

S8(公式)：スタジアム外階段：リュックに JAPAN のキャップを下げ、袖に FUJITSU とある黒Tにビブスの河瀬が駆け上がる。柔道、ソフトなどの取材の様子。英語で海外スタッフに「私ここで撮影できますか？」と聞く河瀬。

S9(医師の指導のもと撮影)：ナレ「開催に複雑な思いを抱くひとびとにもカメラを向けた」。病院。防護服で医師の横を歩き、カメラを向ける島田角栄。

S10：パンクミュージシャン(島田撮影)「オリンピックに対してはうちらがライブとかできないのをやられてたのになんでオリンピック開催するんだ」

S11：撮影会議：ボードに取材メモ。[政治とスポーツ]にクローズアップ。

S12：スタジアムを見つめる河瀬。

S13：番組タイトル：5色のスモーク効果に[河瀬直美が見つめた東京五輪]

S14(公式):国際フォーラム?子どもを集めたイベント:2019年7月 森「これで梅雨明けですよ」バツハが車から降りてきてハグ。ナレ(語り:國村準 ※河瀬映画常連)「これは河瀬さんが最初に撮影した公式記録映画の映像である」バツハ「撮影がはじまったね」子どもと交流するバツハを撮る河瀬。ナレ「オリンピックを心待ちにするひとびとがいた」

S15(公式):19年11月ローザンヌ・IOC本部。バツハに歓迎される河瀬、犬と遊ぶ。ナレ「バツハ会長に問いかけた」

河瀬「オリンピックって金メダルが大事なんですけど、もっと大事なものがあるんですよね?」

バツハ(画面から見切れてる)「オリンピックは世界で最も偉大な競技大会です。でも同時にスポーツの枠をはるかに超える大きな何かを与えてくれます」

S16:東京オリンピック1964年:開会式。ナレ「オリンピックでは大会毎に公式記録映画が作られている」白黒写真:市川崑、公開時の映像、当時のアナ「記録か芸術かでもめた映画は…」字幕[観客動員数1950万人]

S17:どこか草原ぽいところ。白いマントみたいな着て中空に手をかざして光と影を見つめる河瀬。河瀬のキャリアのナレ。河瀬作品『殞(もがり)の森』『朝が来る』(※編者注:撮影助手キック事件の…)の映像。ナレ「一環して人と人とのつながりをテーマにしていた。その原点は自らの生い立ちにある」祖母と幼少河瀬の写真。『かたつもり』の映像。

S18:河瀬インタビュー「SNSとかインターネットの台頭によって実際に会う回数が減ったり、会ったこともない人からいわれのないことを言われたりすることもある。それによって心がよどんでしまったり分断がおきたりする。まあ簡単ではないんですけど、よく言われている相手の気持ちになってとか、ともにとか、つながりとか、私たちがそれを知ることが大事なんじゃないかな」

S19:記録映画プロジェクト企画書のCG画像。クローズアップされる企画書の一文:「映画の神様は、スポーツを通して人々がつながり合う祭典の記録映画をこそ、この世に遺す機会を与えてくれた」字幕(取材対象)[聖火ランナー・被災地の人々・アスリート・ボランティア・建築家・ホテルマン・タクシードライバー]

S20:河瀬インタビュー「競技はもうすでにそのときその瞬間に世界中に配信するテレビ放送するわけだからそこにはかなわないんですね」「そこに行き着くまでのストーリーだったりとか、なんでそんなに相手のためにおもてなしができるのって思うくらい丁寧な細やかなアテンドができると思ったのでそこは記録したいと思ったの」

S21:新型コロナのニュース(武漢とニューヨーク)。2020/3/24 安倍が延期検討。

S22(公式):ナレ「組織委はメディア撮影不可」:延期決定翌日。組織委に行く河瀬、ノーマスク。河瀬「年度内の開催はない?」担当者(鼻マスク)「来年の夏のほうが調整しやすい」

S23:都庁行き地下道・ミライトワ看板、歩く人スローモーション。河瀬(オフ)「まったく無気力になっちゃって、これどうなるんだと。世界が。もうオリンピックなんて言ってい

られないという心情にみんななって」

S24:河瀬事務所 ナレ「リモート取材を続けながら構想を練り直した」

S25(公式):リモート。河瀬「これほんとに開催できるんだろうか」と。

・上野由岐子(ソフトボール)(略)この期間を利用してモチベーションをあげてる的な話。
神様が現状維持で満足するなよって言ってる。

・吉田亜沙美(バスケ)字幕[延期で引退を意識しはじめたアスリートも](略)引退するか迷ってる的な話。

・西浦博(感染症対策の専門家) 河瀬「否定的なのか、肯定、完全肯定という感じではないかと思うんですけども」西浦「オリンピックを開催するにあたって、まずは選手の健康がどうやって保たれるのかというのは1つの壮大な課題ですから、単純な接触を避けるということだけじゃなくて、事前にどこまでリスクを下げればいいのかということから始まりますので、シェルターの中に入ってもらえるようなことが大会の前に必要になってくるんですよ。具体的にアドバイスできるというのも僕ら感染症の専門家としてはやっていけないといけないことなんです。それは距離だけの問題ではなくて、いろんな科学技術が結集してできることだとは思っています」

S26:2021年1月和太鼓を叩く神主、神社で祈る人々。

S27:森会見 字幕[大会組織委員会森会長が辞任][女性がたくさん入っている会議は…]

S28(公式):3月2日理事会 武藤「皆さまから女性理事の増員や3割4割を目標にした女性理事比率の向上を図ることが必要だというご指摘をいただきました」

河野雅治理事「新しい会長が来られた、そして新しい会長のイニシアチブでこういうことが進んでいるんだというような、何か橋本会長のリードでこういうことになったんだというような印象をですね、世間に伝える必要があるのではないかと思います」

※!!!

橋本「ご指摘ありがとうございます。私自身が今いちばん感じていることでした。ただ単に女性理事の比率を上げればいいということではなくて、上げることによって何をもたらしていくのかということが非常に重要だと思っております」

3月22日 ナレ「12人の女性理事が新たに加わった。会議が活性化する」会議で女性理事が発言する様子「コロナと共生するレガシー」国民は本当は望んでいたがコロナ下の開催で「分断されている」とか。

河瀬(インタビュー:NHK撮影)「決められた文章をみんなが読むだけの理事会じゃなくて本当に活発に議論されていたので、あそこはすごく良かったですよね。一つの転換期としたいです。そしてもっと活発な議論と、本当にいままで少数派と言われていた女性たちの声も社会に反映していく。今これってちゃんと具体的に落とし込めているかしらってお客様が思っただけだと、私の映画の役割も大きくなるかもしれないですよ」(公式)組織委で撮影する河瀬。

ナレ「困難を乗り越えようとする人々の姿から映画の新たな着想を得ていた」

S29:車移動、公式映画事務所(晴海)。スタッフミーティング。河瀬入ってくる。河瀬「すごい密(笑)」。

河瀬「劇映画で『シン・ゴジラ』で庵野さんがめっちゃせりふがあったから、すごい早口で俳優に言わせて、表情もものすごく寄って、それをばばばばーって編集していたじゃないですか。あれのイメージはある。AさんとBさんの言葉が重なっていくみたいなそういう編集の仕方をちょっとイメージしています」

ナレ「さまざまな立場の人が結束してゴジラに立ち向かう…(略)」

(※編者注：『シン・ゴジラ』作中、デモに主人公ら官僚・政治家が苦い顔をする場面あり)

河瀬「これはほんまにいわゆるドキュメンタリーの常識みたいな絵(映像)はあえて避けようとしている。特にインタビューは。全然シルエットでもいいっていうぐらいの。なので絵力があつたほうがいい。絵力というか、ハッとするような絵があつたほうがいいかな」

S30:河瀬インタビュー「オリンピックにかかわらず、ドキュメンタリーは何が起こるかわからないものを対象にしているわけだから、構成を立ててそこにはめ込んでいくような作品ではないわけです。これは本当にオリンピックのドキュメンタリー撮っているのかなというような、ちょっと視点をだいぶ変えてやっていく」

S31(公式):2021年3月<ソフトボール沖縄合宿>上野投手取材。

S32(NHK):福島3月25日 車内の河瀬。街を歩く河瀬。ナレ「震災からの復興をかかげて招致したオリンピック。しかし目にしたのは被災地の厳しい現実だった」

廃屋。河瀬「人が帰ってくるができるんだったら片づけることもできるかもわからないけど、帰ってこれないからそのままなんだね」「これが現実のものとは思えないというか、ここまでの10年の時間が閉じ込められて、そして人はいなくなって…」

S33:福島のトーチリレー 走る取材陣、金網の向こうで「がんばーれー」と幼稚園児?が手作り旗を振る。

S34:富岡中学校。ナレ「向かったのは東京電力福島第一原発から10kmの中学校」「オリンピックに教え子が出場するという男性と出会った」斎藤亘(バドミントンコーチ)。校庭。生徒が並んでいる。斎藤「懐かしい場所だなと。ちょうどここでオリンピックに今回出場する桃田選手とかも、渡辺選手、東野選手、みんなここの学校の校舎で学んだので」

S35:体育館バド練習。

S36:原発事故映像。号外が配られている当時のニュース映像。

S37:斎藤インタビュー(NHKの撮影)「震災の直後は私自身ももしかすると福島でバドミントンをすることを諦めかけていたところは本当の話はありますね。震災でめちゃめちゃになってしまった、私の生まれ故郷でもあるこの地だったり、いまだかつてない放射能という未知のものとの戦いだったり、その当時の子どもたちに『早く帰ってきてバドミントンをやろう』この言葉はなかなか言えなかったところもあるんですね。でもやっぱり2か月後に渡辺選手や東野選手、そして桃田選手も戻ってきてくれて、いちばん最初に練習したときの本当に純粋な彼らの笑顔だったり、バドミントンに取り組むものが私たちの元気の源になったな。この子たちが諦めないかぎりには諦められないぞ。そういう気持ちになったのを覚えています」

字幕[教え子が初めて五輪に出場] ナレ「震災から10年、斎藤さんは福島県に新設された学校で後に続く選手を育てている」

S38:海でランニング。ふたば未来学園。字幕[映画は震災から10年の3月11日も撮影]

S39(公式):海に手を合わせる生徒ら。

S40:太鼓、トーチリレーを見る斎藤を撮るカメラのモニター。

S41:富岡中学校前。 斎藤「みんなにとっては違う学校って感じだけど、実は震災も原発事故もなかったらこの生徒だった。本当にうちのチームにとって原点。すごいなと思ったのは、まさか聖火が来るなんて。すごい奇跡だよなと思って。絶対この瞬間はみんなと共有したいなと思って。すごい逆境の中この地区もいろんな困ったこととかあると思うけど、でもそんな中でもできることあるよな！」

河瀬「(撮影している)震災が起きなければ運命はまったく違っていた。まあもちろんそうです。けれども、過去を捨てていないよね。ちゃんとこっちに持ってきてそれを育てている。(インタビュー)絶対あのとき聖火を見た、あの場所で先生と一緒に見たという記憶は残るので、やっぱりこの聖火というもので、希望だったりとかそういうものを届けていけるんじゃないかな」(※編者注:イケル!でいきなり声を張る。二人とも聖火崇拝すごい)

S42:トーチリレー奈良。寺で山伏がランナー迎える。赤ちゃんを撮る河瀬。ナレ、観客が「拍手のみ」であるなどのコロナ状況。 ナレ「違反する人がいないか警察や組織委員会が見守っていた」「河瀬さんの撮影も制限された」 係員「並走やめてください。映画チームもだめです」

河瀬「日本がせつかく世界にアピールできる映像なのに、そこを撮らせてもらえないと本当にもったいないと思う」

S43:東京。街灯フラッグ取り付け作業。渋谷スクランブルの人々。ニュース映像:小池都知事「コロナを押さえ込んでいく。そしてアスリートの皆さんにすばらしい大会を繰り広げて…」 菅首相「安全安心の大会を開催することは可能」

バッハ「大会が開催できるのは日本に「忍耐」という独特な精神と逆境に打ち勝つ能力があるからだ」

S44:JOC前都教委包囲ネットの行動(21/5/18)[オリンピック強行反対]のバナー

ナレ「国民の間に中止を求める声が高まっていた」

電柱の影から見つめる河瀬。道路向こうに公安。

S45:車内の河瀬。お台場走行中。

ナレ「アスリートの思いにカメラを向けていた河瀬さん、テレビ番組で『アスリートのためには観客を入れて開催してほしい』と発言したところ、SNSで非難が殺到した」

(※編者注:民放で、渋谷で若者が大勢遊んでいるのだから五輪を有観客で、と発言した。)

SNSの批判テロップ「河瀬監督何言ってる自分が悪者になりたくないだけ」「オリンピックだけ特別扱いするのはおかしい」「記録映画全く期待できなくなった」「ごりごりなプ

ロパガンダ映画になりそう」

河瀬「オリンピックに関わっている人がそこで一生懸命やっているとする、私はそういう人たちに心奪われるし感動するし、その人に寄り添う、人間として当たり前だと思っているんだけど(当たり前やなと思ってんねんけど)」「しかもね、オリンピックの映画まだできてないからね。どんな映画にするかもわかっていないのに、もう二度と見ないとか。なので私は眠れない夜を過ごしていますよ、それなりに」

S46:ナレ「スタッフからも疑問の声があがった」 スタッフミーティング(リモート)。島田角栄(ここでは名前は出ない)「プロパガンダ的なドキュメンタリー映画ではなく、そういういったところに切り込んで警鐘を鳴らす、そんな感じの内容も狙っていくんですかね？」

河瀬「私はどっちかに寄るってことではないかなと思っていて、今見えている現実¹は現実。オリンピックの放送権料が大枚が入ってきて、そういう現実²は(記録映画で)見せていいと思う」

S47:広島5月17日。原爆ドーム。トーチイベント。トーチキス会場の河瀬。

河瀬「(64年の映像)前の57年前の聖火はここをね、ぶわーって人が囲う」(河瀬インタビュー)「だけどあまりにも違う光景ですね。コロナとはいえ。難しいですね。自分自身がどういう感情で今いるかっていうのを整理して言葉にできない感じです。なんかこうモヤモヤしているというか」

S48:月。ホテル室内で河瀬(ノーマスク)とスタッフ2人(1人は鼻マスク)会議。

河瀬「今回の広島で何かつかめるんじゃないかとは思ったが、これ何かつかめたんだっけ、みたいな」

助監督「ちょっと難しい。きょうみたいなのは難しいなと思いましたね。どう撮ったらいいか、正直」

河瀬「私はオリンピックができないほうに転がっていくんじゃないかなっていうことと、それの何となく気分になっているというか、気分っていうか」

助監督「本当は見えている。見えてきていい頃合いなんですけど、ただここが固まらないじゃないですか、(五輪を)やるやらないとかを含めて。少し激しい方針を皆さんも出していいんじゃないかっていうのは思うんですよね」

S49:国会 6月2日 字幕[専門家が五輪開催を危ぶんだ]

尾身「今の状況で(五輪)をやるというのは普通はない。このパンデミックで。そういう状況の中でやるということであれば、開催の規模ですよ、これをできるだけ小さくして管理の体制をできるだけ強化するというのはオリンピックを主催する人の義務」

S50(公式):組織委。橋本来る。ナレ「**焦点となる観客の有無**、河瀬さんはギリギリまで競技する理事会を見つめ続けた」議論の様子。

(※編者注:この時期に開催/中止が有観客/無観客にすり替わる)

S51:無人のスタジアム。字幕[大会まで2週間][史上初、無観客開催が決定]

S52:映画事務所。ナレ「無観客の大会で何を撮るか議論したい」「午前中から始まった会議が夜9時を回った頃だった」スタッフ会議。ウレタンや鼻マスク。

スタッフ1「本当のオリンピックの姿って価値があるのかどうか。これは続いていくべきものなのかというのは自然と問いかけになる気がする」 スタッフ2「本当にオリンピックの一義的な意味ってやっぱり平和のためなんだ。今でもミャンマーでもあんなことなのに、イスラエルはいったん収まったけど、それが今やる意味なのになぜ誰も語らないんだらうな、言うべきだなと思う」

ナレ「なぜこの状況で開催するのか。大切なのはオリンピックの存在意義を問うことではないか」

スタッフ3「今後この世界が僕らがどうなっていくのかみたいなことを考えるきっかけとか、将来から見たらあそこが転換点だったのか、そういうことを考えるきっかけになる作品になったらいいなと思っています」

S53(公式):成田空港。字幕[7月中旬アスリートが入国] 選手にアルコールスプレーをかけるシーンで[感染対策を徹底]とテロップ。送迎スタッフはウレタンマスク。

S54: 開会式前日。映画事務所、スタッフミーティング。ナレ「開会式前日、河瀬さんは大会に臨む覚悟を伝えた」「異例の大会の光と影を真正面から切り取ってほしい」

河瀬「意識して無観客というショットが欲しいです。各競技場でそれこそがストーリーにつながると思うので。こんな状態のオリンピックをどう描くんだっていうこととか、オリンピックそのものがどうなるんだということがイコールそういうふうにはなるんだけれども、そこは気概を持って臨みたいと思います」(一本締め)

S55:(後半の予告)

[後半]

S56:7月23日開会式

S57(公式):スタジアム外、警官「立ち止まらず…」 外から見たドローンショー。

ナレ「東京五輪が開幕した。映画クルーは国立競技場周辺を取材していた。祭典の空気を少しでも感じたいという人たちでごった返していた」撮影する島田。ナレ「しかし、道路をはさんだ反対側では・・・」千駄ヶ谷駅。Olympic Kill the Poorの反五輪バナー。

ナレ「緊急事態宣言下でのオリンピック、分断された社会の縮図があった」外から見た競技場の花火。

S58:歩く河瀬、競技場前の道路。河瀬「競技をできるだけ観覧して、そしてできるだけアスリートたちのその姿を撮っていききたい。外でデモが起こっていること、そしてテレビを見ている人たち、もっとだよ、そういうことにあんまり関係ないっていうふうに住んでいる人たちも含めて、それを私はできるだけ真実に近い形というか、そういうもので記録していくことや、それは私のまなざしを通してなので主観も入ることもあるかもしれないけれども、でもそこは真摯に描いていききたいと思います」

(※編者注:!!! 2022年5月SideA舞台挨拶等では「私のまなざしが100年1000年残る(カンヌでは50年100年に減っていた)」)

S59(公式):あづま球場、入ってくる河瀬。ナレ「競技最初の撮影は福島市で開催されたソフトボール」「震災からの復興をアピールするねらいもあったが、無観客となっていた」

「河瀬さんが意外なものにカメラを向けた。地元の小学生たちが育てた朝顔だ。世界中からやってくる観客を出迎えるはずだった」

河瀬「いちばんに私が目についたのは子どもたちが育てた朝顔。それがだーっと並んでいて、でも結局みんな観客には見てもらえない朝顔だし、その子どもたちそのものも招待されずに、その気配を映し撮りたいなと思ったので、朝顔越しの誰もいない空間はいちばんに撮りました」

S60(公式):ソフト上野。練習。

S61(公式):客席で打ち合わせする河瀬チームほか。

S62(公式):球場外。入ってくる上野にあいさつする河瀬。

S63(NHK):試合映像

S64(公式):外で関係者入場を撮る河瀬。ナレ「上野投手の活躍の一方、河瀬さんは複雑な思いでいた」

S65:室内。河瀬インタビュー「今回のやっぱり無観客が、スタジアムで（上野投手の）あの姿を見たその中に例えば子どもたちがいる、これがこの次の上野を育む可能性というのは大いにあったはずなんです。その実体験としての力がなかなか届きづらいのかなというのは思うんです。次がイメージできない」

S66:字幕[東京晴海] 映画事務所。スタッフ会議、ボードを撮す。ナレ「映画チームの取材拠点では連日議論が重ねられていた」”性”のカテゴリーにシェフィールド、バイルスなどの付箋。ナレ「テーマの1つが性や人種の違いなどを認め合う多様性だ」

S67:河瀬（記者会見映像？）「女性を含む小さな声がかき消されていっている、そういう現実も見受けられます。その小さな多様性に気づかなければいけない」

S68(公式):成田空港、海外メディアに取材される河瀬。

ナレ「女性の権利のために闘うアスリート取材した」ゲートから出てくるアリザダ(アフガニスタン/自転車) ナレ「その一人、アフガニスタン出身のマソマ・アリザダ選手。今大会では難民選手団の一員として自転車のロードレースに出場する。河瀬さんの取材に力強く答えた」

アリザダ「きょう夢が一つかなったことで、すべての夢は実現できると確信しました。私のオリンピックの活躍を女性たちが見たら『私だってできる!』という気持ちになるでしょう」

S69(NHK):アフガニスタン カブールの街で練習するアリザダチーム。馬車に邪魔され、トラックの排ガスを浴びる。ナレ「アリザダ選手は25歳、今回初めてオリンピックに出場する。アフガニスタンでは女性がスポーツをすることは禁止されていた。」

アリザダ「アフガニスタンで自転車をするのはとても難しいです。車に乗っている人に背後から叩かれたことがあります。自転車をやめるよう大勢の人から罵声を浴びせられたこともあります」

ナレ「2017年アリザダ選手はフランスに亡命した。大学に通いながら東京オリンピックを目指していた。ところが、再びタリバンが権力を握ったアフガニスタン。（タリバンの旗。礼拝のシーン）女性の権利は未だ制限されている（女性たちのデモのシーン。男が鞭

で追い散らす)」

S70(公式):東京大会での自転車競技。字幕[カメラは大会に臨むアリザダ選手を狙う][結果は25人中最下位。それでも表情は明るかった]

アリザダ「初めてのオリンピック、とても幸せな気分です。女性たちには自由に自転車に乗れる権利があることを示せたと思います」

S71:ナレ「アリザダ選手を通じて訴えるべきメッセージ…」映画事務所。PCモニター「その他のエマ担当の難民をどう構成するか?」「林さん担当の難民選手、そしてテグラもいる」

ナレ「河瀬さんは多様性の意味を深く掘り下げたいと考えていた」

河瀬(インタビュー)「『石投げるのアカンやろ、自転車乗ってるくらいで』というのじゃアカンような気がしていて、石投げる理由みたいなものが、そっちの正義があるわけだよ。もちろん世界のグローバルなところでいえば大多数が(デモ女性を鞭打つ映像)『自転車乗ってなんで石なげられなアカンねん女やから』というのは大体わかんねんけど、でもこっち側の人にはこっち側の人の文化(礼拝の映像。銃を置いたままひれ伏して祈る男たち)があって、それがわかってないと、本質、本当の世界には行けない感じ」

S72:記録映画プロジェクト企画書のCG画像に字幕(取材対象)[聖火ランナー・被災地の人々・アスリート・ボランティア・建築家・ホテルマン・タクシードライバー]。

ナレ「河瀬さんにはもう一つ重要なテーマがあった。当初思い描いていたスポーツを通して生まれるつながりだ。大会を裏側で支える人たちを取材する構想だった」

S73:7月25日国立競技場。グラウンドに入っていく河瀬。芝の整備。河瀬「すごいやわらかい。すごくきれいだよ」グラウンドキーパーにカメラ向ける河瀬。

S74(公式):グラウンドキーパー「スポーツの力、その力を信じてわれわれはその準備をする役目として(実際の音声は「われわれは下請け…」)と言いかけている)スポーツの力の一員としてそれに向かってきたというだけです」

S75:整備作業と河瀬「選手がちょっとボールがうまく弾んでいないとかだったら自分たちのせいじゃないかみたいな、そういう下支えをしている人たちの姿もこの映画には入れたいなとずっと思っていて。これをきっかけに全国の小学校のグラウンドが芝生化される、もしかしたらここから始まるなにかになるかもね」

S76:渋谷。スクランブル交差点。4166人、5042人、感染拡大のニュース文字。

S77:競技。ハンマー投げ。字幕[会場内も感染予防を徹底]レスリング。外国人男性審判が布マスクをパカパカさせてふざける。※!!!

跪いて床を雑巾がけするスタッフ(ボラ?)。

S78(公式):福島?競技場の外。河瀬と撮影班。ナレ「希望した撮影場所にカメラを置くことがむずかしくなっていたのだ」

誘導スタッフ「ちよっともめてたので、理解されてなかった。河瀬さんところの(記録映画)ぜんぜんOKです。本当にありがとうございます」河瀬「いろんな会場で起こっていて」スタッフ「ちゃんと周知されてないですよ」

球場内。外国人女性会場スタッフと英語で場所の指定を確認する河瀬。

S79:夜の月島の商店街を歩く河瀬(ノーマスク)「私もギリギリのところまでペナルティつかないようにやっているから」

S80:有明コロシアム?ゲート。河瀬(ビブス)と外国人男女会場スタッフ (※編者注:スタジアム内の撮影ポジションを仕切っているこの人たちはOBCと思われる)

河瀬「(英語には字幕なし)I' m Basket Ball Player」会場スタッフ「(英語/字幕)上司に相談して映画の事情を説明してみます」河瀬「This is キロク、Memory (for) Human Being これは人類のための記録映画です。Thank You For Your Support (手を合わせてお辞儀)」

S81:車に乗る河瀬「あー、あー眠い」車内の駄菓子。

S82:映画事務所に入る河瀬。ナレ「競技外の撮影には手が回らなくなっていた河瀬さん、1人の映画監督を頼った」S46の島田と河瀬のZOOMシーン(再)。島田「プロパガンダ的なドキュメンタリー映画ではなく」ナレ「大会前に映画の方向性を尋ねた島田角栄さんだ。大会期間中の東京の人々にカメラを向けてほしいと依頼した」

映画事務所。水を飲む河瀬に島田「めっちゃしんどいでしょ今。いろんな批判も受けーの」河瀬「批判受けてんの?私」島田「受けてないです。大丈夫っす」河瀬「自分やったらどうなってる 私の立場やったら」

S83:ふたりが出会ったところのツーショット写真。ナレ「ふたりは20年にわたるつきあい」河瀬が映画学校講師時代の教え子。島田の映画。字幕[島田さんが駆け出しのころ作品に河瀬さんが友情出演したことも]金髪カツラのSM女王役の河瀬がロウソクをたらす。(※編者注:けっこう延々とこの映像を使う)

河瀬「(オフ)角栄のようなキャラクターが、(インタビュー画像)オリンピックとの親和性がありえないような、そういう対象に声をかけてオリンピックのことを語っていただくというのは私ではできない。撮ってきたものがどうなるかわからないけど、すごいものが撮れる可能性がある」

S84:島田の聴覚障害者のロックバンドのドキュメンタリー

S85:島田インタビュー「はみだしものから見たオリンピックっていうか、アウトローから見たオリンピック。オリンピックの方ってみんな言うてもオリンピックに出ているから成功者じゃないですか。いろんな角度から、ど正面じゃなくていろんな角度からを見たいっていうのが本当の僕のスタイルで」

S86:字幕[大会期間中様々な立場の人に話を聞いて回った]

パンクミュージシャン(ピンク色モヒカン、絵に描いたようなパンクファッション)「パンク・ハードコア界隈にはオリンピック反対の人けっこういる。オリンピックに対しては、うちらがライブとかできないのをこの1年半とかやられていたのに、なんでオリンピック開催するんだ。ただ批判で『やめたほうがいい やめたほうがいい』と言うんじゃないで、ちゃんともういい大人なんで『ダメだやらないほうがいい』と言うのもいいことだと思うし、『やったほうがいい』というのも大人が考えたことなので。人間どうして争うのはど

うかなとは思いますが。敵はコロナのはずなのに、いつからか人間どうしが憎み合って、マスクを付けてない付けているで電車でケンカしたりとか」

S87:吠えかかる子犬

S88:山谷路上。男性(手にレジ袋)と島田が歩く。男性(字幕のつかない台詞)「寅さんの恰好をしたいなと思って、歩きたいなと思って」

公園。男性にカメラ向ける島田。字幕[五輪反対デモに参加しているという男性][実はお金をもらって動員されていると打ち明けた] 男性(字幕なし)「光熱代から全部一緒に」

カットが変わりビール(※編者注:キリン一番紋。五輪スポンサーではない)を手にした男性(「あらゆる社会運動に参加しよう」等の英文が書かれた白い新品のTシャツ姿)を撮る島田。 男性(字幕あり)「結局デモは全部上の人やるから(主催者が)書いたやつを言ったあとに言うだけ(スマホを見る)」

島田(字幕なし)「デモいつあるでというのはどういった形で知らせが来るんですか」

男性(字幕あり)「それは予定表をもらっているから、それを見て行くだけ」

島田(字幕なし)「あー、はいはいはい」

S89:山谷。宿の前で電話する島田。ビールの入ったレジ袋を下げている。ナレ「島田さんには気がかりなことがあった」「ニュースで見た河瀬さんの取材風景、映画の方向性に不安を感じた」

S90:字幕[仲間に思いを打ち明けた] 夜。コンビニから出てきて仲間の男性と駅前で話す。

島田(鼻マスク)「バツハ会長が広島原爆資料館、原爆ドーム、(該当部分の映像)広島に訪問されているときに、ほかの報道陣のカメラがすごいロングで撮っていて、今回の公認映画のカメラだけやと思うんですけど、バツハ会長のうしろをずっとこう撮ってたやんか。俺その映像をニュースでなんか見てんけど、そのときに『あっこの映画やばいかも』って思った。なんかな」 ナレ「映画にオリンピックへの批判的な視点を盛り込めなくなるのではないか」

島田「(駅前で話す)やっぱり河瀬直美って偉大な監督やし、日本の誇る監督と思う。(島田の取材風景の映像)俺はただ一心。今までのすごくいい経歴があって、今回のこのオリンピックで下手を打たしたくないってことだけ。(駅前)だからもう河瀬直美のこの映画を成功させるためだけ。もうこれだけほんまに」 S81の若いときの2ショット写真。

S91:青空。立川相互病院の[五輪やめて]貼り紙を撮る島田。外、廊下、病室での患者への説明を撮る島田(医師の指導のもとに撮影)。副院長にインタビュー。エレベーター内。

字幕[この日は東京で3,709人の感染を確認] 島田「大変な時期にオリンピックをやられていることに関してはどう思われていますか?」副院長「リスクはゼロにならないにしてもリスクをとにかく減らせる手だては全部打ったうえでね、開催すべきだったんじゃないかなと思うんですよね」島田「こういったコロナで苦しんでいる人、こういうのをちゃんと伝えんと、すべてを覆い隠すような感じで、臭い物にはふたをしろみたいな感じで、東京オリンピックのドキュメンタリー映画にはこういった現場の苦しみっていうのを絶対入

れないと。影と光ちゃんと撮っていかなと」NHKの？撮影者(オフ。字幕あり)「現実をね」

S92:青海？会場。ナレ「一方、河瀬さんは自分にしか撮れない映像を模索していた。この日、河瀬さんが手にしていたのは8ミリフィルムカメラだ」河瀬8ミリで撮りだす。河瀬「のぞいたときの感覚がまったく違っていて、ファインダーのぞくし、光を意識するし、私の中では8ミリでしっかりと自分のまなざしを切り取りたいと思っていて、なんというか私が見たオリンピックというのは原点に戻って8ミリかな」

ナレ「10代で映像の道を志した河瀬さん、初めて手にしたのは8ミリフィルムカメラだった」河瀬作品『につつまれて』の映像。青空に8ミリを向ける河瀬。ナレ「フィルムは撮影時間が限られている。その分、自らの思いを一瞬に閉じ込められると河瀬さんは言う」

河瀬「これって実は2分いや3分ちょっとしか撮れなくて、3分という時間を閉じ込めるのに自分の思いを意識するし、8ミリでのショットがそういうふうになればいいな」

S93:事務所。ナレ「一瞬を記録する。そのこだわりは映像だけではない」「音声スタッフに強く求めた」

河瀬「私が今どこに行っているかということ、私の絵が何を撮っているかということ全部見てなきゃいけない。私がここでコーチ監督を撮っている、その音のほうの方が大事だよ。その判断ができてないと言ってるの！」

音声スタッフ「いやその判断は先に言っといてくれないと」

河瀬「いや、言うことではないのそれ。それは来てって言われていく話ではなくて、そんなことを技術スタッフに言っている暇はないんです。ここで起こっていることはここで一瞬、その瞬間にしか起こらないわけだから、そういうことなんだよ！はい、監督に来てください、はい、制作部に何かしてくださいっていう、そういう劇映画の現場ではないわけ、あそこは」

S94:空手演舞会場。字幕[河瀬さんの思いを受けた音声スタッフ]マイクを様々な角度に向けて設置している。

S95(NHK):ソフト決勝戦。

S96(公式):ブルペンの上野投手。ナレ「テレビ中継が撮さない上野投手の姿を…」上野、別のカメラには撮さないよう要求。前のインタビューの音声(相手が驚く投球をしたい)、ナレでそのための撮影拒否と説明。上野が登板。テレビアナ・解説の声が入るが[公式]のまま。

S97(NHK):最後の一球。日本優勝。

S98:控室？河瀬「ふたば未来学園に2人を応援するのに集まってきて、(映画の)クルーが行って」「福島では未来のオリンピックたちが彼らを応援するっていうような形なので、頑張ってもらいたいですね」

S99:ふたば未来学園体育館。ナレ「福島県双葉郡広野町、映画クルーが撮影していたのはバドミントン部の監督、斎藤亘さんだ。教え子がいま、銅メダルをかけた試合に挑もうとしていた」応援する生徒たち。

斎藤「メダルを争う試合に挑む2名にできることを全力で届けていこう。福島から遠く離れた東京だけれども、気持ちを伝えていきましょう。頑張ってください」

バドミントンMIXダブルス試合風景。ナレ「東野有紗選手と渡辺勇大選手。中学生のとき原発事故が発生、避難先で斎藤さんとともに練習を続けた」勝利、ふたばで喝采。ノーマスクでハグをする2選手。（※編者注：プレーブックでは禁止のはず）

選手2人にフェンスごしに指示する河瀬とカメラマン。選手談話。東野「本当に幸せでしたし、お互いつらいこともあって、本当にありがたいしかない」渡辺「東京オリンピックっていう大きな舞台でメダルが獲得できたっていうのはすごく誇りに思いますし、こうやって開催されたっていうのがまず素晴らしいことですし、いろんな方にサポートしてもらって感謝の気持ちを伝えたいと思っています」。

ふたば、斎藤演説「きょうの試合で私たちや福島の人たちに笑顔と元気と幸せと、こういう選手たちが福島から育ったというご縁と喜びをみんながもらったような気がするんだよね。やっぱりスポーツの力ってすごいと思った。それこそが私たちがここでふたば未来で活動するいちばんのものだと思うから、ぜひふたばの魅力になってこれからも頑張ってもらいたい。その道しるべとなったのが今回の渡辺先輩、東野先輩の銅メダルだと、俺たちもやればできるぞ、同じ道をたどっていきましょう。そういう道しるべをもらったような気がします」

S100(公式):スタジアムの階段をリュックに JAPAN のキャップを下げ、袖に FUJITSU とある黒Tにビブスの河瀬が走る。字幕[開会式から閉会式まで 24 競技を撮影]会場内で河瀬(ナイキの赤T)「一瞬沖縄の声を私に届けてくれたら喜友名君に言えるからさ。いける? まだいける時間?」字幕[離れた会場からインタビューをすることも]河瀬「すごい歴史を刻みました。ありがとう喜友名君」海外メディアの中継席、みんなノーマスクではしゃぐ。

S101:閉会式。

S102:出てくる河瀬ら。JOC前でインタビュー。

河瀬「『これぐらいでいいか』みたいなふうに思わない。そういうアグレッシブな攻め方をしたので、現場現場で撮れるものは撮れたかな。私ができることはこれが精いっぱい。あきらめなかった。撮影そのものがある程度終わったということではあるので、編集が大変なので(ここまで)3割ぐらい。ここから産みの苦しみだと思います。3割くらいだよ、そんなん。ここからやな」

S103:カラス。字幕[大阪・西成 9月]。島田の家。島田「ほんまに家まで来たんすか」

ナレ「河瀬さんに頼まれて撮影を続けていた島田角栄さん。オリンピックの期間中、東京のもう一つの姿にカメラを向けてきた。河瀬さんに見せる映像はオリンピックの影(←聞き取り困難)」

島田(鼻マスク)「反対側っていてもいろんな反対側がいてるんでね、いろんな立場の反対側が。プロの反対側もいてるし、ほんまに困って反対派もいてはるし、一概に反対派っていうひとくくりもなかなかね。だから何やろ、ほんまに色んな人の考え方がね、やっぱりあるんでね。何やろな、不平等な、それに翻弄される人々もちゃんと入れときたいなとか思っていて、映像に(編集する島田。マスクが口までずり落ち)」

ナレ「中でもある男性の言葉が強く印象に残っていた。雑貨店を経営する、あのパンクミュージシャンだ」

島田「飲食はお金もらえるけど、アパレルやからお金もらわれへんみたいなの、すごく**コロナ禍の社会**を今の言葉、いちばんベタな言葉を発しているような感じがして。飾り気のない。こういうのはちょっと映して残しておきたいなと思って(手前の壁にかかる**TOKYO 2020 OFFICIAL FILM**の腕章)」(※編者注：オリンピックではなくコロナの話)

S104:(この場面台詞の字幕なし)10月奈良、河瀬事務所。島田(鼻マスク。Tシャツが旭日旗風のデザイン)が訪問。ナレ「1か月後、島田さんは映像を**40分程度**に編集し、河瀬さんを訪ねた」

別室。島田「嫌やな、怖いな」と落ち着かない様子で河瀬を待つ。ずっと独り言(聞き取り不能)。河瀬が現れると

島田「おお、どうもお姫様。お久しぶりでございます、姫様」

河瀬「見ていいですか」

島田「もちろんです。すいません、お忙しいところ押しかけて」画像を見せる。

河瀬「きっと私には撮れないものが撮れてる」

島田「学生以来ですよ、こんなに緊張するのは」モニターに祈禱する僧侶の映像。

島田が「オリンピック反対」とか説明している。河瀬、タブレットにメモ[角栄レビュー]。

ナレー「映像を見終えた河瀬さん、かつての教え子にかけたのは厳しい感想だった」

河瀬「言ってる人の風貌ややることがどうこうじゃなくて、その人の言ってることがまともなら反対でも賛成でもいいなと思ってんねんけど、中途半端な人はなかなか難しい。パッと見てパッとおもろいというのだけやったら、責任とられへんやんか」

ナレ「一方で、河瀬さんの心をとらえた言葉があった」

河瀬のメモ[(一行目)医療現場…街の様子、開会式、オリンピックおじさん、スカイツリー(ここまでカッコして、なにか判読不能な文字が書いてあり、その下に線があって)**デモ**(二行目)立川病院…パンク shop 店主、居酒屋店主、ユーロ支配人新しい価値観、**町の変なオヤジ**、AV女優、末期がん、演芸場…ハードコア Tシャツ、飛田新地、聖火リレー]など

河瀬「私が見た中では、パンクショップ、AV女優、飛田新地かな。(※編者注：飛田は大阪)パンクショップの店主はちゃんと言うてる。センテンスもまともやし、あんな格好しててジャラジャラつけて入れ墨あって、いわゆる『この人何?』って普段やったら話しかけれへん人が、『正直、不平等なんすよね』って言ってるっていうのはものすごく訴えるものがあるから、そういうのは、あっいいなって」

ナレ「島田さんは、最後に気になっていたことを尋ねた。批判的な視点をどこまで入れられるのか」

島田「漠然として IOC に嫌なことをふたさせられるのではないかっていうのがあったんです。それはバッハさんとの距離を見て。この近さで撮らせてもらえる、ましてや IOC っていう組織の俺のイメージからすれば、アンタッチャブルなところは、撮してほしくないところは、っていうのはバツと入ってきたんで」

河瀬「カメラが近すぎるからバッハさんのパフォーマンスをしっかりと撮らされてるって思ったっていうこと？角栄が…キウ（杞憂？危惧？）することは私にとってたいしたことではない。それであかんという IOC やったらいらんわ。と。自分の描いている世界観を、ここに起こったリアルを描いているわけだから、それに対して NG 出してくるんやったらそういう作品は作らなくていいです。自分たちがやったこと、やろうとしていること、そして国民の、日本国民のリアル、そして世界のリアル、そういうことをしっかりと客観性をもって良いも悪いも描いていくことが後世の記録に、それを見てもらった人にこの時代はこういうことだったんだなっていう風に見えるわけだから。それを受け止めないんだったらオリンピックなんてやってる意味ないじゃんっていう風に思うし、なんでこんなパンデミックの中でやろうとしたの？やったの？っていう、それぐらいの気概がないとダメだと思いますけど？」

帰る島田に抱きつく河瀬がNHKカメラに笑う。

外で島田インタビュー(字幕あり)「率直には安心した。俺は一応ベストを尽くしたつもりでやったんですよ。きょうでまた河瀬さんのスイッチが入ったとは思いました。見せることによって、また河瀬さんの作品の組み立てというか、ビジョンが再確認させられたんじゃないかな。それはきょう来られてよかったし。『この作品からまた新たにオリンピック変わったね』みたいな、俺はそこを期待したい」

S105:注連飾り。奈良今月13日=TV放送時なので21年12月13日。河瀬事務所。編集する河瀬。

S106:河瀬インタビュー「50年後の人が見たときになんてバカな事したんだって思う人もいると思う。人が集えない、集えないのに集うイベントをするという、ものすごいパラドックスですよ。やれないのにやるっていうぐらいのこと、そこから派生するいろんな感情。それが闇と描くのか、未来への提言というかそういうふうなものとして希望という意味でも描くのか、今から本当すごく難しい数式を解くみたいな感じになっていくかなと思っていますよね。これはもう本当に時代の転換期、教科書に載る。私たちが見たことは歴史上の本当に大きな1ページだったなと思います。だからそこは責任を持って描いていかなきゃいけないんじゃないかなと思いますね」

S107:湾岸で8ミリで撮る河瀬。字幕[映画の公開は6月]

クレジット

語り 國村準

取材協力 東京オリンピックパラリンピック競技大会組織委員会

武部由実子 北條美穂

資料提供 ©International Olympic Committee

組画 キノフィルムズ

朝日新聞/ゲッティ 読売新聞/アフロ

©ARTE G. E. I. E. /Baozi Production 2021

TO ブックス Punk Film

撮影 横山健四郎

照明 生形清 音声 岩城享平

映像デザイン 岩瀬夏緒里

音響効果 大池隆仁 映像技術 横木敬行

編集 浮田浩治

ディレクター 山口洋樹

制作統括 岩崎大輔

制作・著作 NHK 大阪